

太宰治『お伽草紙』論

—— 孤独な男たちの物語 ——

河原 優 人

太宰治の『お伽草紙』は、昭和二十年十月（西暦一九四五年）に筑摩書房から刊行された小説である。この小説について考察するにあたり、まず作品の成立当時の時代背景から見ていきたい。

周知の通り、太平洋戦争は昭和二十年八月に終戦となる。『お伽草紙』は終戦間際の昭和二十年三月に執筆が開始されている。戦争も激化し、日本本土に爆撃がたびたび行われる。そのような時節に、『お伽草紙』は執筆され、戦争が終結した昭和二十年の十月に刊行されるのだ。戦時中に執筆され、終戦直後に刊行されているという点は『お伽草紙』が書かれた背景として念頭におくべき事柄の一つであろう。

執筆当時に太宰がどのような状況下にあったのかを確認するため、小山清氏の『お伽草紙の頃』の一部を引用する。

十二月の末には太宰さんは、「惜別」の資料調査のため仙台へゆかれたりして、「お伽草紙」の実際の執筆は、翌年昭和二十年の三月でした。

（中略）

「舌切雀」を書き終へられたのは、七月上旬、日をおかず府は爆撃をうけて、水門町のお宅は焼かれて、私が駆けつけたときは、柳町の大内さんのお宅に避難されておられました。「薄明」にある通り園子さんは眼を病んでおりました。然し太宰さんは飲めば、変わらず悪戯つ子のやうでした。私は完成した「お伽草紙」の原稿を託されて、帰りの汽車の中でおそらく最初の読者たる欲びを味わひました。^①

ここから、先に述べた通り、太宰は昭和二十年三月に『お伽草紙』を書き始め、七月上旬に、「舌切雀」を書き終えたことが分かる。この点を指して磯貝英夫氏は次のように述べている。

敗戦ぎりぎりのおしつまつた時期にこういう作品が書かれたことも稀有であれば、敗戦からわずか二か月後の十月二十五日にこういう書物が出版されたことも稀有であり、さらに、戦中の原稿が戦後にそのまま通用して、何らの断層を感じることもないことは、いっそう稀有である。^②

としている。この『お伽草紙』の特異性への指摘は概ね頷けるだろう。もちろん「戦中の原稿が戦後にそのまま通用して、何らの断層を感じることもない」という点については高塚雅氏が指摘している通り、太宰の小説の中には戦後改編されているものが多いぶんあり、原稿から出版、改編の段階で変更が加えられている点も考慮しておく必要があるが、こと『お伽草紙』においては作品の根底が覆されるほどの改編はなかったように見受けられる。先の言葉を使うなら「戦中に書かれたこの作品が戦後に読まれ、何等の断層を感じることもない」のは、物語が戦争に主軸を置いていないためであると私は考える。この物語の主軸について考えるにあたり、『お伽草子』の各物語の共通点に焦点を絞って論じていくこととする。

二

『お伽草紙』は、「前書き」より始まる。空襲のためか、防空壕に避難した親子四人。父は、防空壕が窮屈だという母を曖昧なことを言っただけで、壕から出たがる娘に、絵本を読んで聞かせる。

ムカシ ムカシノオ話ヨ

などと、間の抜けたような妙な声で絵本を読んでやりながらも、その宮中には、またおのずから別個の物語が醗酵せられれているのである。

これは、前書き最後の一文である。この一文には、以後の四つの

物語がどのような形で語られているのかを端的に示している。つまり、この後の物語は、「防空壕の中で父が娘に絵本を読んでいる時」「父の胸中に創作された別個の物語を」「第三者の語り手が」「読者に主観を交えつつ語り聞かせている。」という構造を採っているのだ。例として「瘤取り」の文中の一部を見てみよう。

①私は、いま、壕の中にしゃがんでゐるのである。さうして、私の膝の上には、一冊の絵本がひろげられてゐるだけなのである。私はいまは、物語の考証はあきらめて、ただ、自分ひとりの空想を繰り返りひろげるとどめなければならぬだらういや、かへつてそのほうが、活き活きして面白いお話が出来上るかも知れぬ。②などと、負け惜しみに似たやうな自問自答をして、さて、その父なる奇妙の人物は、

この部分に出てくる「私」とはもちろん「壕の中にしゃがんでゐる」のであるから、「父」である。つまり、①の部分までは「前書き」に登場する「父」の独白であることが分かる。その後の②の部分は、「さて、その父なる奇妙の人物は」という記述から、第三者の語り手が読者に語りかけているとわかる。このような語り手の交代ともいふべきものが、この小説にはしばしば起こっている。

また、作品中に、「作者の私」「太宰といふ作家」のように、第三者の語り手が筆者である太宰自身であるように書かれている記述があることから、「この作品における第三者の語り手は太宰である」とした上で、論じていくこととする。

『お伽草紙』を各物語の共通点から読み解こうとするうえで、主人公たちの共通性は重要な要素である。『お伽草紙』を「家族から孤絶した場に身を置いて始めて、自分の生きる自由と善良さを確保しようとする男たちの物語だ」と論じたのは角田旅人氏であるが、角田氏は、あえて「対立」に焦点を当てて論じている。ここにその一部を引用する。

太宰は、第一の物語「瘤取り」の末尾で、その内実は（性格の悲喜劇といふものです）と解説している。「劇」というものが、「対立」を軸に、そこでの葛藤とそこに生ずる緊張の開放、対立の解消ということの基本パターンとするものだとするのなら、四編いずれも「対立」の様相を扱う「お伽草紙」は、全体としても「性格の悲喜劇」の物語だと言えなくもない。むしろ太宰はそう受け取られることを狙っている気配さえある。「中略」

ところで、そのような物語組成の操作によって浮かび上がっているものは何か。それは、主人公役の人物たち全てが共通して示す、彼らに固有のある、境遇^{きょうご}であろう。（瘤取りの二老人も浦島さんもカチカチ山の狸さんも……（中略）……これはただ、太宰といふ作家その愚かな経験と貧弱な空想を以て創造した極めて凡庸な人物たちばかり）のだが、彼らは一様に自分を（孤独な男）だと思っている。（おれは寂しいんだ。孤独なんだよ）という「狸」の嘆きは、彼らが共有する、思い^{おも}いがある。

〈孤独な男〉というものは、『お伽草紙』の主人公に共通するテーマである。主人公達は、自らが持つ孤独から逃れようと、もしくは、孤独を癒そうと足掻く。その姿こそが、この物語の本質であると私は考える。このテーマについてより深く考察する上で、『お伽草紙』の最初の物語である「瘤取り」をまず見ていきたい。

四

「瘤取り」の冒頭は父が娘に語っているであろう「ムカシ ムカシノオ話ヨ」という言葉から始まる。

この書き出しは、前書きを見るに絵本の最初の記述部分であろう。たった三行の書き出しであるが、それを読んで「父」は、「その絵本の物語と全く別個の新しい物語」を胸中に描きだす。その軽妙で自在な文章は、『お伽草紙』の魅力の最たる部分である。カナで記述されている部分には、「コブヲ モツテル オヂイサン」だけであるが、この部分から描きだされた物語には、瘤を持ったお爺さん、お婆さん、息子の三人が存在する。

お爺さんは、酒飲みで、家庭において孤独である。そして、先に引用した本文にも書かれている通り、家庭においては常に浮かぬ顔をしている。

そんな酒飲みのお爺さんと対照的に、お婆さんと息子は真面目な人物、となっている。このような家族に囲まれている状況は、お爺さんにとって、非常に息が詰まるものであることは家庭での飲酒・食事風景として本文中にも表れている通りである。お爺さんの右の

頬に大きな瘤ができたときも、息子は興覚めたことを言い、お婆さんは命に関わるものか尋ねたきり、関心も示さない。

『お伽草紙』の他の三作「浦島さん」「カチカチ山」「舌切雀」の主人公達も、程度は異なるがこのような「孤独」を持つ。「浦島さん」の浦島太郎は誰にも迷惑をかけないよう努めて上品に暮らしているのに人々に批評されることに嫌気がさし、「カチカチ山」の狸は生涯理解者を得られず、「舌切雀」は家族の中で孤立する。その意味で、『お伽草紙』は、「孤独な男たち」の物語であるともいえるだろう。そして、それと同時に、彼らは皆、現状に対する不満を持っていて。「瘤取り」「舌切雀」においては、家庭内の自らの境遇に対して。「浦島さん」はお互い他人の批評を気にして暮らしている人々に対して。そして「カチカチ山」は自らの地位と言うべきものへの不満を、それぞれ持っている。つまり、先の言葉に付け加えて言うならば、『お伽草紙』は「孤独で、不満を抱えている男たち」の物語であると言うことはできないだろうか。

これまで、『お伽草紙』の主人公達の共通項を探ってきた。次に、物語上の共通点を見ていくために、「瘤取り」の場面を進めて鬼達の月下の宴の場面を見ていきたい。

山にたきぎ拾いにきたお爺さんは、木の虚の中で夕立が止むのを待つうちに眠ってしまう。そして、夜に起きて、外に出ると

見よ。林の奥の、やや広い草原に、異形の物が十数人、と言ふのか、十数匹と言ふのか、とにかく、まぎれもない虎の皮のふんどしをした、あの、赤い巨大の生き物が、円陣を作つて坐り、月下の宴のさいちゆうである。

鬼達が集う月下の宴。「瘤取り」の主人公はこの世のものと思えぬ場所に迷い込む。そして、その場所に受け入れられる。

この構図は『お伽草紙』の他の二編「浦島さん」「舌切雀」にも存在する。「浦島さん」は竜宮城、「舌切雀」は竹藪の中の雀のお宿が、「瘤取り」における月下の宴のように一種の聖的空間として働いている。これまでこの点を指摘した多くの論者の言葉を借りるならユートピア、桃源郷というべきであるこの空間でそれぞれの物語の登場人物たちはどういった行動に出たのか、その部分に着目して見ていきたい。

「瘤取り」に置いては、この世界に現実世界から迷い込む人物は二人、主人公である右の頬に瘤を持つ酒飲みのお爺さんと、左の頬に同じく瘤を持つ「人品骨柄は、いやしく無い」立派なお爺さんである。酒飲みのお爺さんが迷い込んだ際は、先ほど書いた通り、酔った状態で、思いがけず迷い込み、鬼達を観察したうえで、鬼達の円陣に飛び込んで自慢の阿波躍りを披露した。結果、お爺さんの瘤は「また来てもらうために」鬼達によってむしり取られる。翻つて、立派なお爺さんは、酒飲みのお爺さんから月下の不思議な宴の話聞き、自分も瘤を取つてもらおうと男み立ち、鬼達のいる月下の宴に赴く。

立派なお爺さんは、月下の宴に「鬼に踊りを見せに行くのだから、鬼退治に行くのだから、何が何やら、ひどい意気込みで鉄扇右手に、肩いからして」自らの意思で立ち入るのであり、この時点で酒好きのお爺さんとは大きく違う。そして、鬼たちの酒宴の円陣のまんまかに行くのは同じなのだが、「恭々肅々と歩を運び」と、酒飲みの

お爺さんの「何の恐れるところもなく、円陣のまんなか飛び込んで」とでは明らかに差がある。踊りなど、立派なお爺さんはまさに「傑作意識」を持ちすぎた故に、酒宴には似つかわしくない格闘ばった舞を舞ってしまったのである。

この行動の差によって、二人のお爺さんの明暗は分かれる。酒飲みのお爺さんは、瘤を取られたが日常は何も変わらず、立派なお爺さんは、「本当に、ジャマツケなものとして」憎んでいた瘤が反対側の頬にもう一つ出来るといふ結果となった。ここで留意すべきは、非現実的空間に適応したのは「酒飲みのお爺さん」であり、彼は孫のようにかわいがっていた瘤を取られるも「損も得も無く、一長一短といふやうなところか」と結んでいるのに対し、非現実の世界に適応できず、場違いな行動を取ってしまった「立派なお爺さん」は「ジャマツケなものとして憎み」嫌っていた瘤を反対側の頬にまで付けられるという悲劇に見舞われた事である。

この物語の結末を、作者はただ一言「性格の悲喜劇といふものです。人間生活の底には、いつも、この問題が流れてゐます。」という文章で結んでいる。「性格の悲喜劇」という言葉はこの作品の、ひいては「お伽草紙」の物語にある一つのテーマを端的に表すものである。

さて、ここまで「瘤取り」を例にとつて、『お伽草紙』全体のことについて論じてきたわけであるが、「瘤取り」に続く各作品についても、今まで見てきたことを確認しながら、順に見ていきたい。

五

「浦島さん」では、浦島太郎は旧家の長男である。津軽の旧家の三男である作者太宰治のことを想起させるのは必然であろう。

この浦島が持つ孤独や不満の源泉は「人からの批評」である。弟妹達の無遠慮な批判を聞いた際は怒らず苦笑するだけであったが、後に一人海岸に出た際に、その不満は「素朴の疑問」となつて表れる。

「人は、なぜお互ひ批評し合はなければ、生きて行けないのだらう。」という素朴の疑問に就いて鷹揚に首を振つて考え、「砂浜の萩の花も、這ひ寄る小蟹も、入江に休む鳥も、何もこの私を批評しない。人間も須らくかくあるべきだ。人おのおの、生きる流儀を持つてゐる。その流儀を、お互ひ尊敬し合つて行く事が出来ぬものか。誰にも迷惑をかけないやうに努めて上品な暮らしをしてゐるのに、それでも人は、何のかのと言ふ。うるさいものだ。」と幽かな溜息をつく。

そのような考えを持つ浦島にとつて、亀によって連れてこられた竜宮城はまさに思い描いた通りの理想郷であろう。浦島は、亀に連れられて、このように述べている。

客を迎へて客を忘れる。しかも客の身边には美酒珍味が全く無造作に並べ置かれてある。歌舞音曲も別段客をもてなさうという露骨な意図でもつて行はれるのではない。乙姫は誰に聞かせ

ようといふ心も無くて琴をひく。魚どもは誰に見せようという
衝ひも無く自由に嬉々として舞ひ遊ぶ。

そして、亀は浦島に向かって言う。

ええ、どうぞ。ここへ来て遠慮なんかするのは馬鹿げておま
す。あなたは無限に許されてゐるのです。

この言葉ほど「浦島さん」における竜宮城を的確に表しているも
のではない。周囲からの批判に孤独や不満を感じている浦島にとつ
て、このような世界は理想の世界であることは間違いない。

その理想郷に浦島太郎を連れていった亀に未だ目を向けていな
かった。そう、この作品に置いては度々浦島太郎と言葉を交わして
いるあの亀である。亀は、この作品においては、浦島と対になる存
在として描かれている。浦島の疑問に答えを返し、浦島の考えに反
論し、浦島に竜宮城についての知識を伝授する。まさしく、この
作品の影の主人公のときき存在である。彼は竜宮城に住みながら、
「陸上生活に少しかぶれて、それこそ聞いたふうの批評なんかを口
にするやうになつて」ちよとど陸上と竜宮城の中間にいる存在とし
て主人公の浦島を非現実の世界に導いていく。

翻つて、竜宮城に住む乙姫は、竜宮城という桃源郷を体現する存
在として描かれている。彼女について語るには、まず竜宮城につい
ての描写を追っていく必要があるだろう。

竜宮城についた浦島は、その竜宮城は自分が考えていた、想像し
ていたような場所ではないことを知る。以下は情景描写と、竜宮城

についての亀の言葉を三か所から引用したものである。

○あたりを見回したが、壁も柱も何も無い。薄闇が、ただ洋々と
身近に動いている。

○この廊下はただの廊下ぢやないんですよ。魚の掛橋ですよ。よ
く気をつけてごらんなさい。幾億といふ魚がひしとかたまつて、
廊下の床みたいな工合ひになつてゐるのですよ。

○竜宮ではこの藻を食べて、花びらで酔ひ、のどが乾けば核桃を
含み、乙姫さまの琴の音に聞き惚れ、生きてゐる花吹雪のやうな
小魚たちの舞ひを眺めて暮らしてゐるのです。

この竜宮城は、客人である浦島にとつて「無限に許された」世界
であつた。乙姫は、そんな竜宮城を体現する存在である。乙姫は自
ら言葉を発することは無い。文中にある通り「無言の微笑」でもつ
て浦島を許すだけである。乙姫は、言葉を話さず、何も考えず、た
だ幽かに笑つて「聖諦」をかき鳴らすのだ。

「無限に許されてゐる」状態に生まれて初めて置かれた浦島は、
暫しの間、安楽な暮らしを満喫する。この場所は、浦島にとつて、
まさしく夢の世界だつたであらう。

しかし浦島は、これまで居た場所の素晴らしさを理解しながら、
それでも陸上の人として生きていくことを選ぶ。しかし、陸上に
戻つた彼には何も残らず、彼を救つたのは、結局竜宮城から持ち
帰つた年月と忘却であつた。

ここで、前の「瘤取り」を思い出していたきたのだが、彼の作品と比べて、この作品は明らかに「非現実の世界」の比率が大きいことがわかる。この物語は非現実の世界である童宮城を舞台に物語は進行していく。「浦島さん」において主人公は『お伽草紙』中で最も非現実の世界に長く、濃密に触れる。次の「カチカチ山」との対比と共に着目するべき点であろう。

六

「カチカチ山」は、「気に入らぬものには平気で残酷なことをする」アルテミス型の兎の少女と、狸仲間でも風采あがらず、ただ団々として、愚鈍大食の野暮天であった「気の毒な狸の物語」として、お伽を元に書き上げられたものである。

読み進めていくと、狸に対しては、「唾を飛ばし散らしながら物語る」「いやにねばつこい口調で嘆願して」「いやらしく笑ひ」などを始めとして、否定的に表現されている。このように徹底して醜く描かれている狸であるが、物語を構成する父や語り手である作者は、一貫して狸の視点で物語を再構成し、この狸が愛すべき存在であるかのように書いている。『お伽草紙』は「孤独で不満を持つ男の物語」であるため「カチカチ山」もそのような孤独を持つ男たちに寄り添う物語となっているのだ。

この狸の孤独や不満は、すべて「女にいちども、もてやしなかつた」ことに収束している。彼は商人に扮した兎に、火傷へと唐辛子を練ったものを塗りたくられた際、七転八倒しながらこう叫ぶ。

「ううむ、何ともない。この薬は、たしかに効く。わああ、ひどい。水をくれ。ここはどこだ。地獄か。かんにんしてくれ。おれは地獄へ落ちる覚えは無えんだ。おれは狸汁にされるのがいやだったから、それで婆さんをやつつけたんだ。おれに、とはが無えのだ。おれは生れて三十何年間、色が黒いばかりに、女にいちども、もてやしなかつたんだ。それから、おれは、食慾が、ああ、そのために、おれはどんなにきまりの悪い思ひをして来たか。誰も知りやしないのだ。おれは孤独だ。おれは善人だ。目鼻立ちは悪くないと思ふんだ。」

そして狸は、惚れている兎に騙されて散々な目に遭う。兎の凶行の以前にあわや狸汁になりかけるといふ大厄を被り、そこから這う這うの体で逃げ出してきたかと思えば、想い人に大火傷を負わされる。さらに、傷口に唐辛子なんてものを塗り込まれ、最後には泥船と共に水の中に溺死するのだ。

この「カチカチ山」の終わりには、『お伽草紙』の作品中、最も悲惨な結末となっている。この物語には救いなどという代物は無い。中年の狸は、アルテミス型の兎の少女に惚れたばかりに湖の底に沈む。『お伽草紙』の中で最も現実を見て、現実に生き、現実に救いを求めた哀れな狸は、同じ次元には一人の共感者も得られずに想い人によって殺されるという結末を迎えるのだ。

「曰く、惚れたが悪いか。」

本文にある通り、まさしくこの一文がすべてを表している。自ら

を嫌っている人物にそうとは知らず孤独の赴くままに近づいてしまった者の末路がこれである。まさしく、この「カチカチ山」は相容れない二人の物語と言えるのは間違いない。しかし、ここまでの物語を考え合わせると、この物語の最も重要なのは、『お伽草紙』中で唯一「一度も非現実の世界に行かず、現実世界で孤独を癒そうと足掻き続けた」物語であると言える点であろう。「瘤取り」では「一夜」迷い込み、「浦島さん」では「幾日も」過ごした非現実の世界だが、「カチカチ山」の狸は、一度たりとも非現実の世界に迷い込まずに、最後まで現実で生き続けたのだ。この事實は狸がたどった末路と共に、忘れてはならぬ点であろう。

七

「舌切雀」は『お伽草紙』に収められている最後の作品である。家庭内にある不満、迷い込んだ異なる世界、相容れない二人の登場人物。これまで見てきた物語の要素が、この作品の至る所に散りばめられている。

「舌切雀」の物語の主人公は、「未だ四十歳にもならぬ」周りのものに自らをお爺さんと呼ばせている男である。「日本で一ばん駄目な男」とされているこのお爺さんは、元は大金持ちの三男坊であり、親戚からは「病弱の馬鹿の困りもの」として扱われている。津軽の名家出身の太宰の面影がここにも表れている。

「舌切雀」に出てくるお爺さんとお婆さんは、同じように家庭を描いている「瘤取り」に出てくるお爺さん、お婆さんと比べても、かなり厳しい目線での評価を受けている。「世間的価値がゼロ」「つ

まらない女だ」とまで言い切られているのは『お伽草紙』の中でもこの作品のみである。なぜ、こうまで辛口の評価を受けてしまっているのか。他の作品と比較してみると、それは筆者である太宰に「最も近い」登場人物たちであるからではないだろうか。むろん、小説であるからには幾らかは現実から変えてはあるが、「からだが弱い」「名家出身」「父母の期待にそむいて」などの人物の背景は筆者を思い起こさせる要素が「舌切り雀」には非常に多く書きこまれている。

「舌切雀」にはもう一人重要な要素がある。もちろん「雀」である。彼女は物語の中でお婆さんに舌をむしり取られるが、その直前に、この雀はお爺さんと言葉进行を交わしている。話している言葉といい、お爺さんの「格別おどろかず」といった態度といい、「浦島さん」における亀が連想される。この亀や雀は言葉を発している場合において、主人公であるお爺さんの内面を代弁する存在、いわゆる「内なる葛藤」を表しているものとして描かれている。つまり、この会話の部分はお爺さんが自己と対話している、自問自答している部分だと言える。

そう捉えると、お爺さんの在り方が見えてくる。「世の中の人は皆、嘘つき」と言いながら、「人のことなど言へるがらぢやない」と自らの立ち位置を理解している。それでいて「おれでなくちや出来ない事もある。俺の生きてゐる間、おれの真価の發揮できる時機が来るかどうかかわからぬが、しかし、その時が来たら、おれだつて大いに働く。」といつか世の中の人のように現実世界で身を立て生きていく志を捨てていくわけではないのだ。このお爺さんの心情は押さえておくべきだろう。

その後のお婆さんとの口論でも、お婆さんが「ただ、時たま、あなたから優しい言葉の一つも掛けてもらへたら」と言った際には「お前の言ふ事なんぞ、みんなごまかしだ。その時々安易な気分本位だ。おれをこんな無口な男にさせたのは、お前です」と、お婆さんの態度は取り付く島もない。彼の言う「世の中の人」にはお婆さんも当然の如く含まれている。

そして、雀は舌をむしり取られて飛び去ってしまい、お爺さんは「異様な熱心さを以て」毎日竹敷の中を探し回り、大雪が降った翌日に、「竹の柱の小綺麗な座敷」に迷い込む。そこで、ようやくお爺さんは舌を抜かれた雀「お照さん」と再会を果たす。

何も言はなくてもよかつた。お爺さんは、幽かに溜息をついた。憂鬱の溜息ではなかつた。お爺さんは、生れてはじめて心の平安を経験したのだ。そのよろこびが、幽かな吐息となつてあらはれたのである。

これまで現実世界で感じえなかつた心の平安を、「舌切雀」のお爺さんも「非現実の世界」で初めて感じている。この「なにも言はなくてもよかつた」というのは、「浦島さん」の竜宮城に通ずるものがある。あちらは乙姫がそれを体現していたが、この「舌切雀」では、主人公がすでにその境地を垣間見ている。

『お伽草紙』の他作品において、非現実の世界に永住する主人公は存在しない。「舌切雀」のお爺さんもその例外ではない。家に帰つたお爺さんは、お婆さんに詰問されて「仕方なく自分の不思議な経験をありのままに答へる」のである。お婆さんはその話を信じては

いながつたが、「お土産の葛籠の中でも一ばん重い大きいやつを貰つて来ませう」と竹敷に向かう。

しかし、「たそがれ時、重い大きい葛籠を背負ひ、雪の上に俯伏したまま、お婆さんは冷くなつてゐた。」となるのである。

この物語の結末は、一国の宰相の地位にまで昇つたお爺さんが、「この出世も、かれの往年の雀に対する愛情の結実である」と言う世の人に対して

「いや、女房のおかげです。あれには苦勞をかけました。」

と云つて終わる。なぜお爺さんはこのような発言をしたのだろうか。爺さんがお婆さんを認め、出世したのは「お婆さんのおかげ」と言うようになったのはなぜだろうか。この謎はお婆さんが既に死んでいることを意識すれば分かりやすい。お爺さんが嫌い、恐れていたのはあくまで「世の人」であつて、異なる世界にいる者たちを恐れることはない。お婆さんは死んで現実世界とは異なる場に行くことによつて初めてお爺さんから「優しい言葉」を掛けられるのだ。「舌切雀」は、これまでの作品の要素を多く持ちながら、最後は対立していたお婆さんが現実世界からいなくなることで、ようやくお爺さんは他者を認めるに至るのである。

八

この小説の奇妙な点として、二つの不在が挙げられる。まず一つ目は、「前書き」に書かれている作品は、『お伽草紙』に書かれてい

る「瘤取り」「浦島さん」「カチカチ山」「舌切雀」の四編だけではない。「桃太郎」もまた、前書きには書かれているのだ。そこから、『お伽草紙』に「桃太郎」が存在しないのはなぜなのか、という疑問が当然浮かんでくるものと思う。

もう一つは、本来「前書き」と対になって書かれるべき「後書き」が存在しないことが挙げられる。言われてみれば確かに、額縁の下半分が無いような、奇妙な状態である。

「なぜ桃太郎が『お伽草紙』には存在しないのか」という疑問に就いては、「舌切雀」の冒頭にその手掛かりがある。

舌切り雀の冒頭では、非常に多くの文量を割いて「なぜ桃太郎を書かなかったか」ということが書かれている。

いやしくも桃太郎は日本一といふ旗を持つてゐる男である。

日本一はおるか日本二も三も経験せぬ作者が、そんな日本一の快男子を描写できる筈が無い。私は桃太郎のあの「日本一」の旗を思ひ浮かべるに及んで、潔く「私の桃太郎物語」の計画を放棄したのである。(中略)

だから、私はここにくだいくらゐに念を押して置きたいのだ。瘤取りの二老人も浦島さんも、カチカチ山の狸さんも、決して日本一ではないんだぞ、桃太郎だけが日本一なんだぞ、さうしておれはその桃太郎を書かなかつたんだぞ。本当の日本一なんか、もしお前の眼前に現はれたら、お前の両眼はまぶしさのためにつぶれるかも知れない。いいか、わかつたか。この私の「お伽草紙」に出て来る者は、日本一でも二でも三でも無いし、また、所謂「代表的人物」でも無い。これはただ、太宰と

いふ作家がその愚かな経験と貧弱な空想を以て創造した極めて凡庸の人物たちばかりである。

この物語はあくまで「弱者」の物語なのである。本文中の言葉借りるなら、「日本一」だとか「誰にも絶対に負けぬ完璧の強者」などは、この物語には相容れないものなのである。

この物語に「後書き」が存在していないことも、このためであろう。太宰治は、なぜ「後書き」を書かなかつたのか。その答えを探るには、これまで順に見てきた物語を総括する必要がある。

「瘤取り」では、酒飲みのお爺さんが不思議な現象に適応し、様変わりした状態で帰宅したが、結局孤独から救われることはなかった。「浦島さん」の浦島太郎は、竜宮城に招かれ、「無限に許された」場所で見当もつかないほどの時を過ごしたが、陸上に戻った彼を救ったのは、登場人物の誰でもない、玉手箱の中に入っていた「三百年の年月と、忘却」である。

「カチカチ山」では、最初から許される空間に見向きもせず、ただ現実には生きる中年の狸が主人公であるが、彼は惚れた兔の少女によつて湖面に沈み、最後の「舌切雀」では、お爺さんは最終的に出世するが、それは対立し、お爺さんの孤独を作り上げたお婆さんの死が前提となっている。

作者自身の要素を散りばめて作った登場人物はこの『お伽草紙』という作品中で、このような末路をたどる。この章の「瘤取り」の冒頭で、『お伽草紙』は「孤独で不満をもつ男たちの物語」であると私は言った。彼らの孤独が癒されるのは、非日常の世界に存在する時である。現実世界に居ながら、孤独から逃れることができたの

「は「周囲の人々が存在しない状態」に置かれた時のみである。

孤独をもつ主人公たちが現実世界で救われるには、真に独りになるしかない。このような終わりには、あまりにも救いがなすぎざる。だから太宰は「後書き」を書かなかったのであろう。もし「後書き」を書いてしまえば各主人公が孤独や不満に対する「救い」または「癒し」を渴望していたにも拘わらず、物語は誰も救われず終わってしまふ。しかし、「後書き」の不在によって、物語は「これで終わり」という一つの指標を失う。つまり、『お伽草紙』は、あえて「後書き」が書かれなかったことにより、続いたままの物語となつたのである。

今のままでは、主人公達は救われない。しかし、いつか真に「孤独で不満をもつ男たち」が救われることを願つて、この作品は「後書きのない物語」として世に残っているのである。

【注】

- (1) 小山清「お伽草紙」の頃『太宰治全集』第五巻 一九四八年一月 八雲書店 四一〜四六頁
- (2) 磯貝英夫『お伽草紙』論』一冊の講座 太宰治』一九七四年六月 双文社出版 二六四〜二八五頁
- (3) 高塚雅「太宰治『お伽草紙』試論 ―『お伽草子』の成生・成立に戦争がどのような影響を与えたかを考える―」『中京国文学』第二十八号 二〇〇九年三月 中京大学国文学会 五七〜六七頁
- (4) 角田旅人「お伽草紙―孤独への遁走曲―」『解釈と鑑賞』第52巻6号 一九八七年六月 至文堂 一三〇〜一三四頁

【参考文献一覽】

- ・太宰治『お伽草紙』二〇〇九年四月 新潮社
- ・一冊の講座編集部『太宰治 日本の近代文学』5 一九八三年三月 有精堂出版
- ・三好行雄編『太宰治必携』一九八一年三月 学燈社
- ・太宰治『太宰治全集』第七巻 一九六七年十月 筑摩書房
- ・東郷克美『お伽草紙の桃源郷』『日本文学研究資料叢書 太宰治Ⅱ』一九八五年九月 有精堂
- ・森厚子『太宰治『お伽草紙』の表現構造―語りに関する方法論の試み―』『日本文学研究資料叢書 太宰治Ⅱ』一九八五年九月 有精堂
- ・長谷川泉『瘤取り―太宰治―』『日本文学研究資料叢書 太宰治Ⅰ』一九七〇年三月 有精堂出版
- ・高塚雅『太宰治『お伽草紙』試論 ―『お伽草子』の成生・成立に戦争がどのような影響を与えたかを考える―』『中京国文学』第二十八号 二〇〇九年三月 中京大学国文学会
- ・佐藤厚子『太宰治『お伽草紙』論 ―昔話から「新しい物語」へ―』二〇〇六年三月『椋山女学園大学研究論集』椋山女学園大学
- ・越智良二『太宰治「舌切雀」管見』『愛媛国文と教育』第二十二号 一九九〇年十二月 愛媛大学教育学部国語国文研究室
- ・大久保典夫『お伽草紙』論覚え書』一九八三年三月 有精堂出版
- ・磯貝英夫『お伽草紙』論』一冊の講座 太宰治』一九七四年六月 双文社出版

・角田旅人『『お伽草紙』―孤独への遁走曲―』『解釈と鑑賞』第52
卷6号、一九八七年六月 至文堂

・野原一夫『太宰治 人と文学』上 一九八六年十二月 リプロポ
ト

・野原一夫『太宰治 人と文学』下 一九八六年十二月 リプロポ
ト

・津島美知子『回想の太宰治』一九七八年五月 人文書院

・森安理文『太宰治の研究』一九六八年二月 新生社

〈付記〉

本稿における『お伽草紙』の引用は、太宰治『太宰治全集』第七
卷（一九六七年十月 筑摩書房）に拠り、必要に応じてルビを省略
した。

（かわはら・まさひと）